



雨の日に見る

作詩 大木 悅夫

作曲 多田 武彦

冬、ほのぐらい雨の日は
ザボンが輝く、ザボンが ザボンが
これは、眼をひらいて見る夢なのか。

街燈は ぬれている、
泥靴はあえいでいる、
風は雀をふつと飛ばしている、
人間の後姿はいそいでいる、
歌は絶えている

電線はひきつっている、
枯木はふるえている、
わたしの身体は凍えている、
わたしは祈りをわすれている。
そうして、わたしはただ見る、
ほのぐらい雨の影のなかに
ぽつかり朱葉の浮ぶのを 輝くのを。

冬、ほのぐらい雨の日は
ザボンが、ザボンが輝く

静かな冬の雨の日にザボンの果実が輝いている様子から、内面の感情や自然とのつながりを深く描写しています。

雨に濡れた冬の風景が詳細に描かれ自然と自分を対比させて「わたしの身体は凍えている」「祈りをわすれている」と、寒さや孤独、精神的な冷えという内面の感情を表現し、「これは、眼をひらいて見る夢なのか」…、と現実と夢、あるいは幻想と外界の風景の境界が曖昧に。

詩の最後に再び「ザボンが、ザボンが輝く」と繰り返すことで、雨の日の静かな中にも、心の奥底にある希望や美しさが静かに輝いていることを示しています。

この静かな輝きは、日常の中で見落としがちな小さな幸せや、心の奥に秘めた強さを思い出させてくれます。

雨の日に見る

大木惇夫 作詩

多田武彦 作曲

中庸の速度で、しみじみと

$\text{♩} = 88$

T-1.2 f

B-1.2 f

ふ ゆ ほのぐらい あめの日は ザボンが_____か がやく

5 Hm mp

ザボンが_____ ザボンが_____ これは眼を ひらいて見る

9 smorzando mp

ゆ めな の か mp Hm $= 112$ がいとうは ぬれている

13 どろぐつは あえいでいる かぜはすずめをふつとばしている mf

Hm _____ Hm _____

17 にんげんのうしろすがたは いそいでいる p

Hm _____ うたは 耐えている p

21

でんせんは ひきつっている カレ木は ふるえている

わたくしのからだは こごえている わたくしはいのりを わすれています

25

わたしのからだは こごえている わたくしはいのりを わすれています

29

そしてわたしは ただ見る ほのぐらいあめの かけのなかに

33

ぽつかりザボンの うかぶのを かがやくーの を ふゆ ほのぐらい

38

あめの日は ザボンが ザボンが かがやく